慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	青森懸八戸市日計遺跡
Sub Title	Excavation of the site in Hibakari (日計), City of Hachinohe (八戸), Aomori Prefecture (青森懸)
Author	笹津, 備洋(Sasazu, Masahiro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1960
Jtitle	史学 Vol.33, No.1 (1960. 12) ,p.71- 83
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19601200-0071

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

青森縣八戸市日計遺跡

笹津備洋

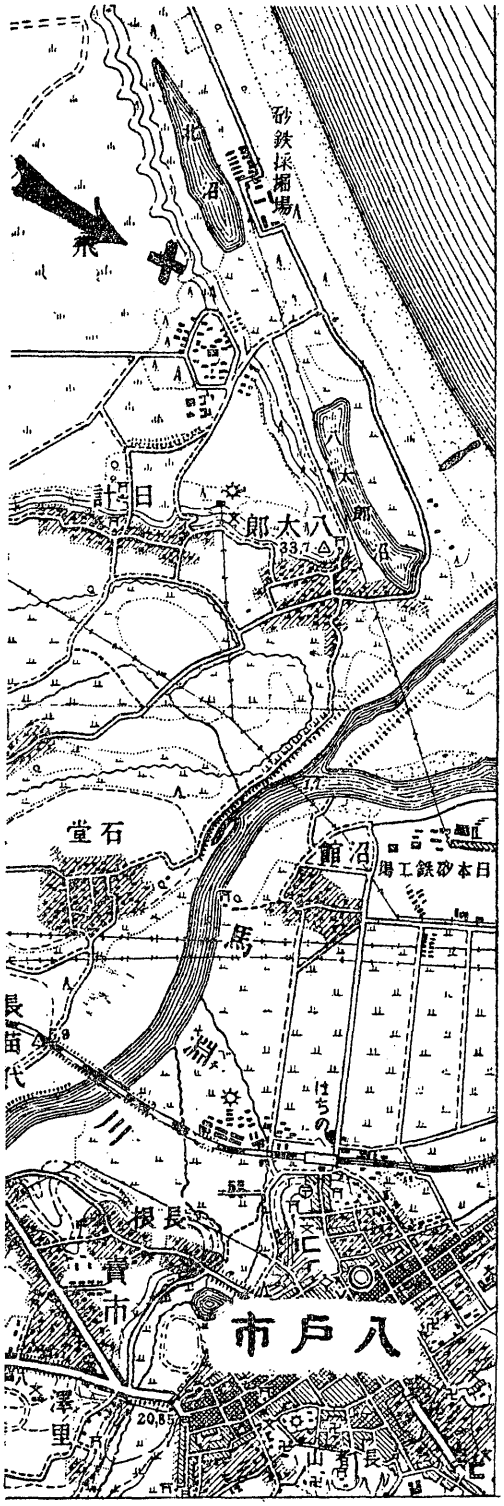
昭和二十六年八戸市白濱遺跡を發掘調査中の江坂輝彌氏の下に、當時米軍高館基地に勤務中の大阪谷良郎氏が、同基地ゴルフ場から採集した土器を持參された。この中に貝殼文、押型文土器があることを江坂氏が注意し、米軍から返還を待つて、昭和三十二年八月二日より四日まで發掘調査を行つたものである。

發掘參加者

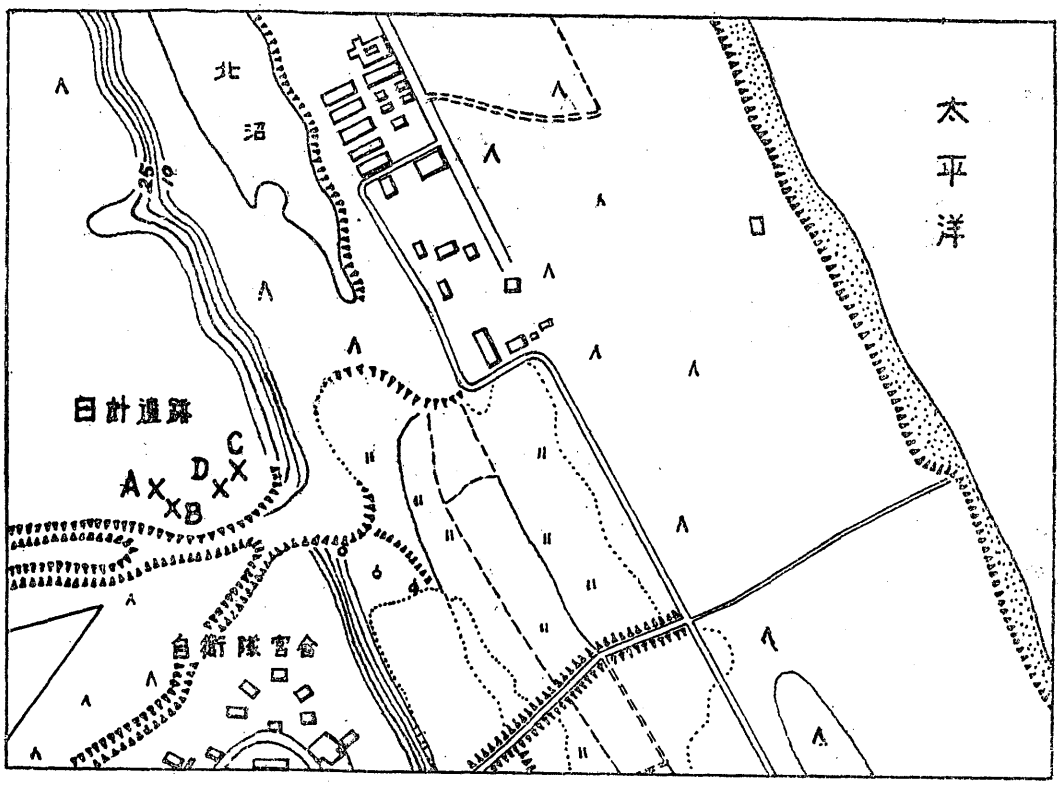
江坂輝彌、笹津備洋、音喜多進、渡邊一雄、渡邊誠、西村廣、市川金丸、瀧澤幸長、小井田幸哉、高橋平八及青森縣立八戸工業高校生

遺跡　（第1・第2圖）

八戸市の北方、八太郎沼を隔てゝ太平洋に臨む標高三十米の臺地上に位置する本遺跡は、現在海上自衛隊八戸航空隊構内の東南隅であるが、舊米軍高館基地のゴルフ



第 1 圖



第 2 圖

場として、ブルトーザーによる整地作業を受けた爲、有機土層の大部分を除去され、僅かにピット狀の部分に黑土の殘存を認め得る樣な狀態であつた。この爲遺物の大部分は露出、散亂し、本報告に於ても表面採集による遺物を利用せざるを得なかつた。

發掘經過

八月二日、遺跡の西側に南北にAトレンチ（20×2m）を設定、包含層は5～30cmで遺物は甚だ少かつた。Aトレンチの東約20mに南北にBトレンチ（8×2m）を設定發掘したが遺物は甚だ少かつた。A、Bトレンチの中間に爐址と思われる燒土があり、その付近より、纖維土器貝殼文土器がやゝまとまつて出土した。

八月三日、遺跡東寄りに東西にCトレンチ（12×2m）を發掘、更に東側にDトレンチ（12×2m）を發掘、Cトレンチより少量の押型文土器及び石器を發見、Dトレンチには見るべき遺物がなかつた。

結局二日間の發掘で少量の遺物を採集し得たに止り、遺物相互の共伴關係、層序關係等は知り得可くもなく、僅かに地點によつて出土遺物に變化ある事を推測し得た

のみであつた。然しながら出土遺物、表面採集による遺物等に注目すべき點が多いので、遺物の内容について後述したい。

遺物

一、石器

本遺跡には定形の石器と、不定形の石器とがある。兩者が共存したものか否かは不明である。先づ不定形の石器について述べよう。

a群（第3圖、1、2、3、4）サイドスクレーパーと見るべき一群

フレイクの兩側に各々異つた面から兩側にリタッチを加えたもの（1、4）、兩側に一面だけからリタッチを加えたもの（2、3）がある。その他の部分はフレイクの原面を殘し、基部にはプラットフォームを殘している。4はその先端にもリタッチを加えているが本群に入れた。

この群に入れるものに別に（第4圖1）の如き例がある。大型のフレイクの兩側に一面からリタッチを加えたもので、その形狀が、やゝ大なる他はそのテクニックに於いては前述の諸例品と全く異る所がない。但しこの種のものは只一例で破損品にも類例を見ない。

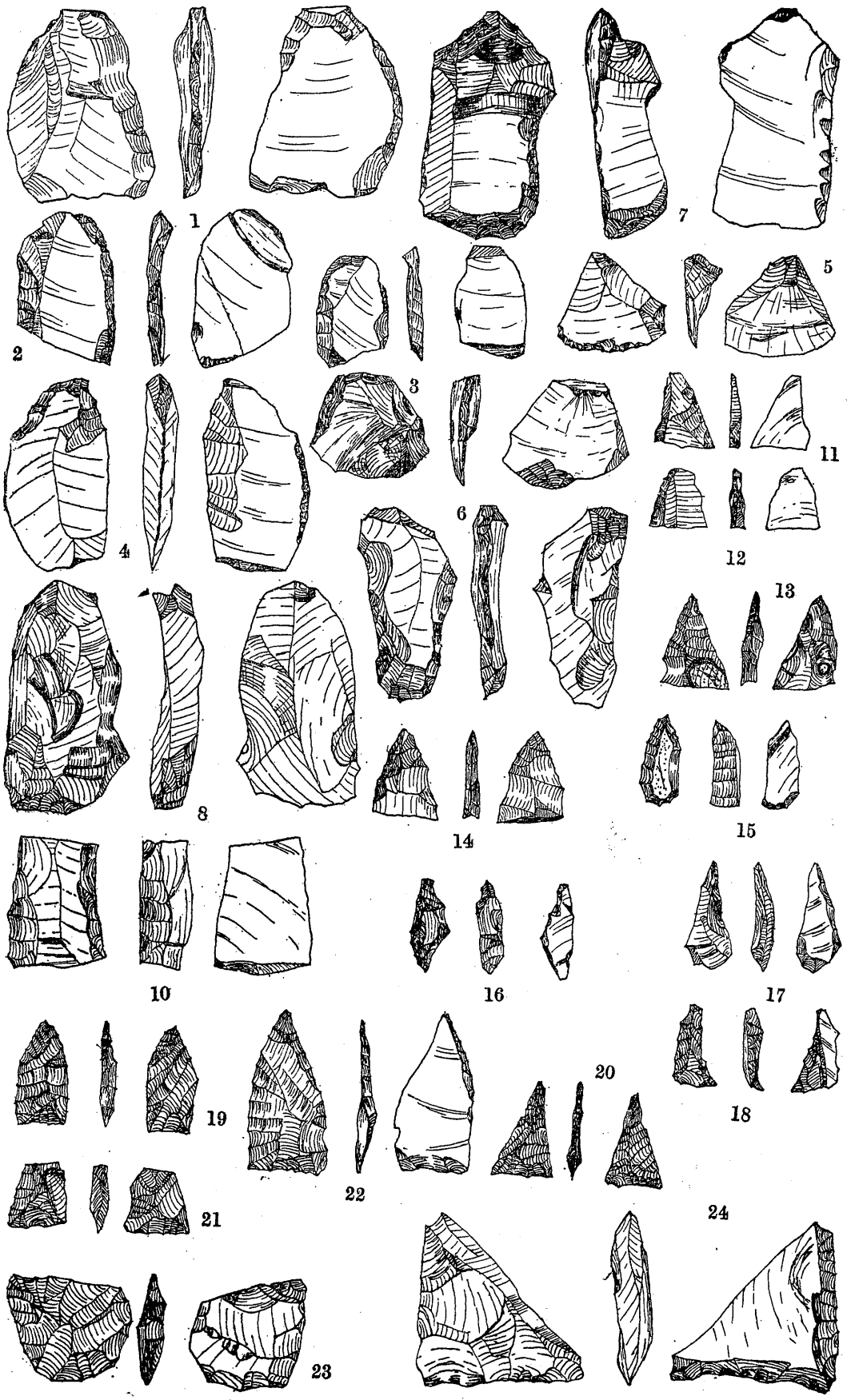
b群（第3圖、5、6、7、8、9）エンドスクレーパーと見るべき一群。

本群には薄いフレイクを基材とするものと、厚いフレイクを基材とするものとがある。前者は5、6に見る如く斷面が「く」の字形になり、その先端の薄くなつた部分にリタッチが加えられている。後者を加工した場合にはプラットフォームが見られず、7に見られる如く兩側にもリタッチを加えたものも見られる。

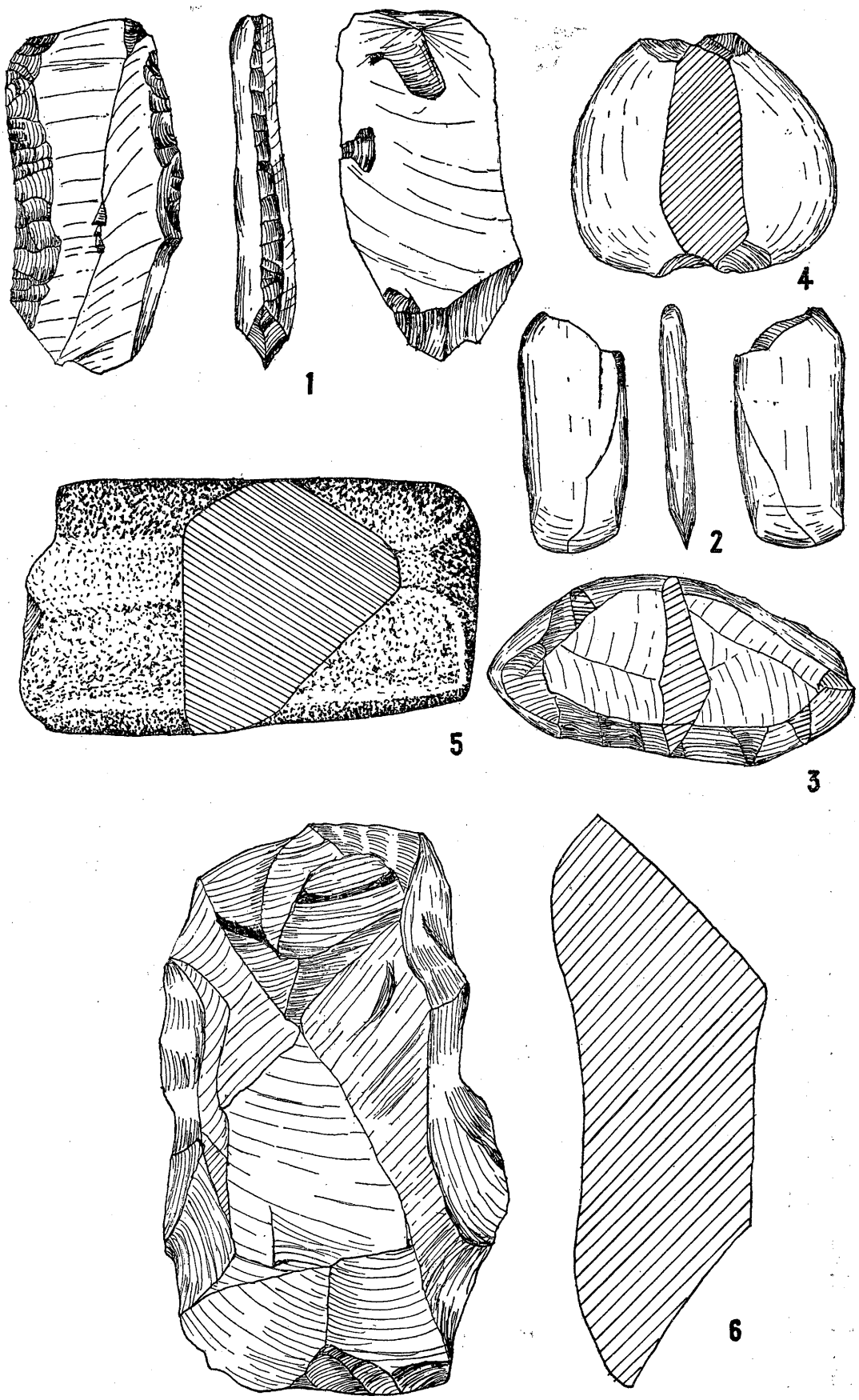
c群（第3圖、13、14、15、16、17、18）尖頭器と見るべき一群

13、14に見られる如き三角形の一群と、15～18の如き錐狀のものとがある。前者は兩側に兩面からリタッチが加えられ、フルーティングは顯著でない。15～18は柱狀のフレイクの二面乃至三面にリタッチが見られ、一面はネガティブの面がそのまゝ殘つている。

d群（第3圖、10、23、24）マイクロスクレーパー類似のもの



第 3 圖　石器實測圖（1）　縮尺½



第 4 圖　石器實測圖（2）　縮尺½

非常に小さなフレイクの一側にリタッチが加えられたものである。

その他（第3圖、10、23、24）

10は柱狀のフレイクの兩側にリタッチを加えたもの、23、24は定形の石器の破損品とも見られるが、破損品中にも例品があり、完形の石器として扱うべきものと考えこゝに記すことゝした。

以上不定形の石器について述べたが、（以上はすべて硅質頁岩製）次に定形の石器について述べよう。

石鏃（第3圖、19、20、21、22）

19は薄い五角形鏃で、フルーティングが一側から他の側に通つている場合が多い。20、21は二等邊三角形の鏃で細いフルーティングが見られる。22は前三者より大形で、一側を除き片面加工で、リタッチは粗雜である。

石錘（第4圖4）

發掘品は圖示した一例のみであるが、表面採集では非常に多く發見されている。

打製石斧（第4圖6）

安山岩の礫の一面に荒くパーカッションを加えたもの。破損品にも三點例品がある。

磨製石斧（第4圖2）

扁平長楕圓形の小礫の先端を研磨して刃を付したもの

砥石（第4圖5）

砂岩製　薄手の剝片の緣邊部に研磨された痕が見られる。研磨された部分は巾1cm、厚〇・5cmで擦切砥と思われる。

安山岩製　斷面梯形の砥石で稜の部分及び最も狹い面が研磨されている。

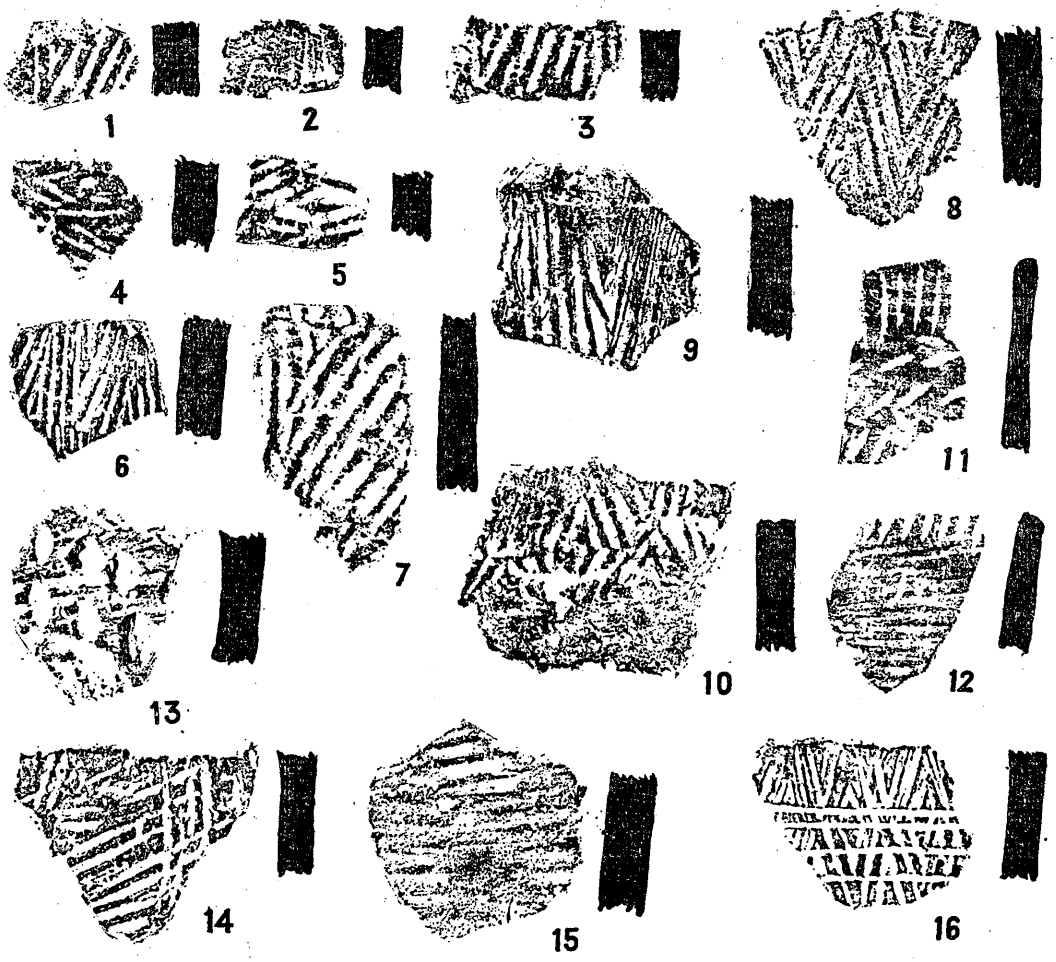
二、土器

本遺跡出土の土器は次の4種に大別することが出來る

第Ⅰ類　貝殼文土器
第Ⅱ類　繩文土器
第Ⅲ類　無文土器
第Ⅳ類　押型文土器

第Ⅰ類土器

a、器形は、口緣平緣で、圓錐形の尖底器厚は、0.5～1cm 口緣上面は傾斜した平面をなす。燒成は良好で、胎土に白色の砂粒を含み、色調は、灰褐色、淡黃褐色、



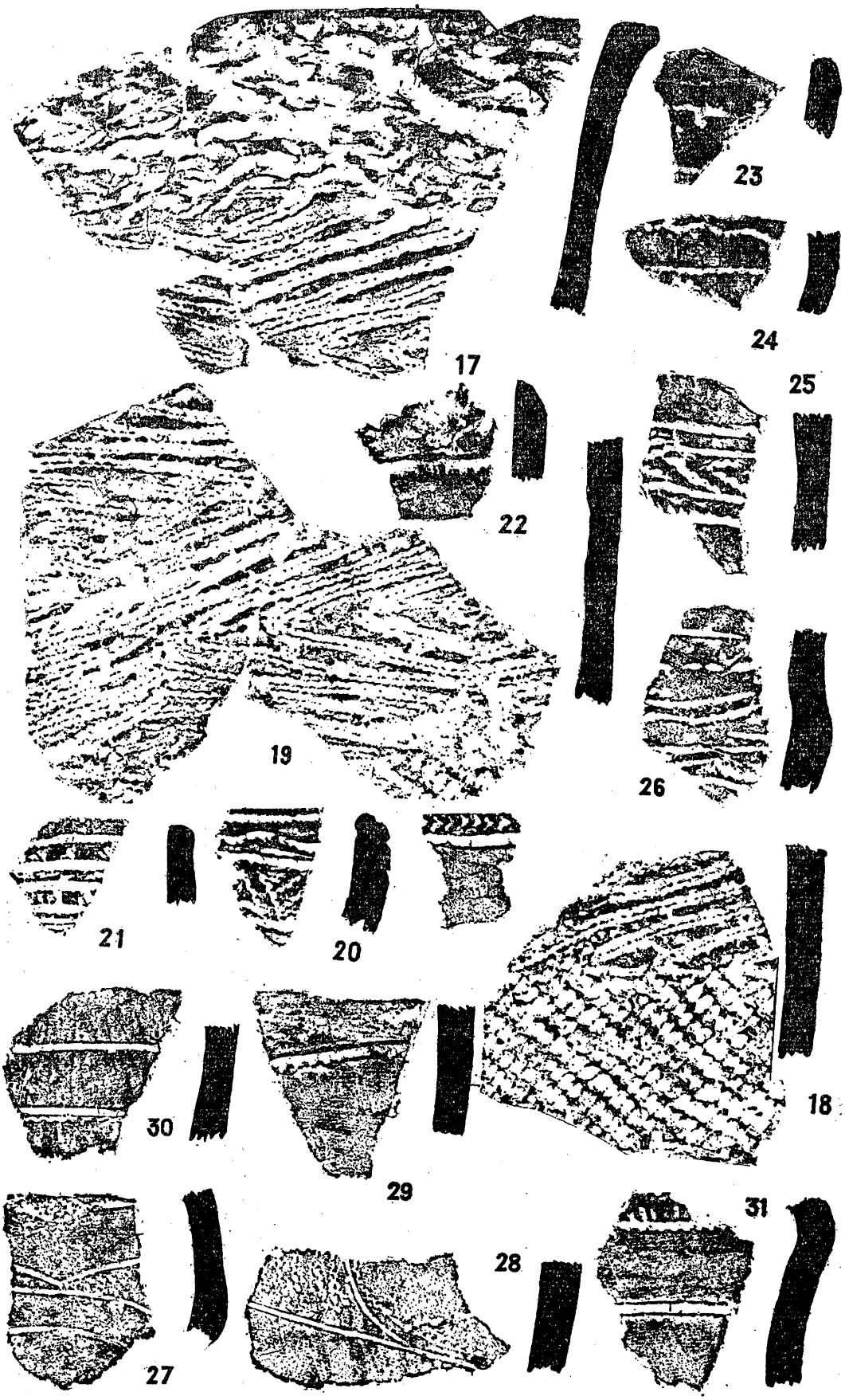
第５圖　土器拓本（１）　縮尺½

赤褐色を呈す。文様は口縁直下に１～２糎の平行な沈線を縦に施し、その下に爪形文、貝殻條痕文を施す。（第５圖11～14）裏面にも不定方行に貝殻條痕文を施す。（第５圖15）

b、器形は、波狀口縁で外反し、胴部斷面は「く」の字をなしてすぼまり、砲彈形尖底をなす。器厚は 1cm 内外、燒成は良好で、色調は橙色を呈す。文様は器體上半に施され、口縁下に一乃至數條の貝殻腹縁文又は沈線を横位に施し、その下に沈線の直線又は曲線で文様帶を劃し、その中を貝殻腹縁文で充塡する。更にその下に二～三條の沈線文と貝殻腹縁文を水平に施す。口縁内部にも一本の沈線と短い貝殻腹縁文を施している。（第６圖20～31）

第Ⅱ類土器

a　器形は不明、口縁は平縁、器厚は 0.5～0.8cm、燒成は中程度、胎土に少量の纖維を含む。色調は淡赤褐色を呈す。文様は口縁



第 6 圖 土器拓本（2） 縮尺½

下に二條の沈線を水平に施し、器面全體に單節、左撚りの斜繩文を施す。方行は、左、右傾共にあり、胴部に二條の綾絡文が横位に施されたものがある。

b　器形は、大きな波狀口縁で、強く外反し、胴部はふくらみを持ち、平底である。口縁は肥厚し、上平は水平、器厚は 1cm 内外で燒成は不良、胎土に多量の纖維を含む。文様は、口縁下に絡狀帶壓痕文を施し、その下に重複菱形に撚糸が施され、それ以下胴下半には單節、左撚りの斜繩文が左傾して施されている。（第6圖、17、18、19）

第Ⅲ類土器

器形は、口縁平縁、圓錐形尖底、器厚は 0.5cm 内外のものと、1cm 内外のものとがある。燒成良好で、色調は灰褐色を呈す。

第Ⅳ類土器

a　器形は不明、器厚 0.8～1cm、燒成良好で、色調は淡黃褐色、淡赤褐色を呈す。文様は大小不同であるが、變形山形文、重複菱形文の廻轉押型文が施されている。二種類の文様が組合せて施されている例はない。

（第5圖 1～9）

b　器形は不明、器厚は 1cm 内外、燒成良好で、色調は淡赤褐色を呈す。文様は巾約 1.5cm の羽狀押形文が、横位又は縱位に施されている。組合せの文様はa同様見られない。胎土に少量の纖維を含む（第5圖10）

以上本遺跡出土の土器を大別したが、量的には第Ⅰ類第Ⅱ類土器が多く、又表採品中には少量の晩期土器片が見られるが、これは地點的にやゝ異ると思われる。

考察

一　各土器の編年上の位置

第Ⅰ類土器a、はその諸特徵が江坂氏の云う小船渡平式と一致する。異る點は沈線文によつて構成された土器が全く見られない點である。第Ⅲ類土器は、小船渡平、八戸市館平の發掘例より考えて、第Ⅰ類aに伴う無文土器と考えてよいであらう。

第Ⅰ類bは、その諸特徵は全く物見臺式に一致する。

第Ⅱ類aは、その諸特徵から考えて、ムシリ式に比定すべきものと考える。bは大木式の諸特徵に一致する。

第Ⅳ類土器の編年上の位置は最も問題になるものであ

るが、少しく他の發見例について考えて見たいと思う。

二　押型文土器の編年上の位置

本遺跡に最も近い押型文土器出土遺跡は青森縣上北郡三澤町大字大三澤字早稻田貝塚[1]、同縣同郡六ケ所村唐貝地貝塚[2]である。早稻田貝塚からは吹切澤式、ムシリⅠ式、槻木Ⅱ式、春日町式又は上川名貝塚上層式土器に比定し得る土器が發見され、又二種の原體を押捺した押型文土器が表面採集されている。

この押型文土器は胎土にかなりの纖維を含み、色は黃褐色で一例は單節斜繩文と組合さつている。唐貝地貝塚からは、山形文の變形と思われる文様が縱位に施された押型文土器の胴部破片が表面採集されている。胎土は粗雜で微量の纖維を含み、表面は黃褐色である。同貝塚からは(1)花輪臺Ⅱ式以降に對比すべきもの、(2)花輪臺Ⅱ式に對比すべきもの、(3)田戸下層式の古い部分に並行すると考えられるもの等の土器が發見され、佐藤達夫氏は『押型文土器が(1)に伴うことは明らかであるが、恐らく他の土器にも伴なうであらう』を述べていられるが、その論據は示されていない。

更に北海道東北部に於いては、この種の押型文土器が多數發見されている。即ち古く杉山壽榮男[3]、八幡一郎[4]、河野廣道氏[5]等によつて注意に上り、近年河野氏が朱圓式土器[6]、兒玉作左衞門、大場利夫兩氏が、溫根沼式押型文土器[7]と呼ばれたものである。

河野氏は朱圓式土器について『器形は底部に向つて細まり、底が尖つている。口緣部は單純であるが、多少カリパー狀に內方に向つて彎曲しているものもある。內は底部に向つて厚く、口緣部に向つて薄くなり、口唇部は極めて薄い。胎土には多量の纖維の混入が認められる。文様は撚糸文、型文、繩文などがある。型文は俗に連續山形文と稱せられるもので、繩文は斜行繩文である。撚糸文は不規則に配列している場合が多い。』と述べられ廻轉押型文にも尖底のものがあることが明らかになり、撚糸文土器などと伴出することが判つたとされている。

兒玉作左衞門、大場利夫氏は「根室溫根沼遺跡の發掘について」という報文で、同遺跡出土の押型文土器を三様に分類されている。

Ⅰ　胎土に砂粒と纖維を含み、褐色、鉢形尖底で、底

は圓錐形よりやゝ丸みを帶びた形態、口緣部は一般に薄く、口頸部はやゝ内彎している。文様は廻轉押型文で、斜狀、羽狀又は交互に表現しているが、羽狀のものが多く、横位の施文が多いが縱位もある。

Ⅱ　大略はⅠに同じ、口頸部に横環した隆起帶が認められ、口頸部の分位やゝ著明、文様はⅠと同じいが、格子縞狀に付されたものがあり、本式でも後期と思われるものには、文様が粗雜で、施文方法も混雜しているし、折衷様式も見られる。

Ⅲ　胎土に小石、砂粒を含み、赤褐色、鉢形で、圓錐形尖底、口頸部は少しく内彎、水平口緣で、口頸部に横環した小隆起帶がある、文様は口頸のみに短刻文を並列施文し、地文はない。』と述べられ、『これらは恐らく年代差であり、Ⅱ類は縄文との接衷様式であり、Ⅲ類はその特徴が住吉町下層式にきわめて類似している。』と述べておられる。

更に河野氏は「北海道出土の押型文土器について」[8]といふ論文で、押型文土器を朱圓式（溫根沼式は朱圓式と同系統であるという）と神居式（平底・纖維を含まぬものが多い、杉山壽榮男氏の第一類土器B式）とに分けられ、北海道土器文化の初期に位置づけ、その分布を示しておられる。朱圓式押型文土器は溫根沼式押型文土器の第Ⅱ類に當るように思われるが、その分布は北海道の東北半、太平洋岸とオホーツク海沿岸に限られている。

さて日計遺跡出土の押型文土器について考えれば、第Ⅳ類bは溫根沼Ⅰ類と非常に類似している。aは北海道發見例に類品を求めることが出來ないが、胎土に纖維を含まないこと、單一の押型文によつて文様が構成されていることなどから、bに先行するものと考えられる。佐藤氏が花輪臺Ⅱ式に比定された斜縄文の施された土器は、青森縣下北郡東通村尻屋ムシリ出土の土器に、口緣下に二條の沈線を施した纖維を含む尖底の斜縄文の土器があり、これと同様の土器は八戸市長七谷地貝塚にも見られるものであり、これらと對比する方が妥當であると思われる。これらの土器はムシリ遺跡でⅡ式又はⅢ式に伴うものであつて、赤御堂貝塚の出土品にも同様な事實を認めることが出來る。更に唐貝地貝塚貝層下から出土した、佐藤氏が白濱式に先行するとされた沈線文土器は

明らかにムシリⅡ式と認めるべきものであり、この點からも前述の斜繩文土器はムシリⅡ又はⅢ式に伴うか、それよりも降る時期のものと見るべきであろう。唐貝地、早稻田出土の押型文土器が、前述の斜繩文の施された土器に伴うといふ見解は、その諸特徴から見て妥當であると思われる。さすればこの種押型文土器も又ムシリⅡ式又はⅢ式に伴うものと云うことが出來よう。このような點から日計出土のⅣ類bの土器は、少量の纖維を含むということからムシリⅡ式に伴うものと見られる。上述の諸點から考えて、日計Ⅳ類aが纖維を含むⅣ類bに先行するといふ推測が許されるならば、纖維を含まぬ點からムシリⅠ式に伴うと見ることが出來るのではなかろうか。ムシリ遺跡ではムシリⅠ式に伴つて物見臺式土器が少量出土しているが、本遺跡から相当量の物見台式土器が出土していることは、Ⅳ類aの編年上の位置をこの時期に比定することの妥當性を示しているように思われる。

上述の諸點から、日計遺跡の押型文土器は早期末葉に位置せしむべきものであり、佐藤氏の說かれる如く古い時期に位置せしむべきものではない。北海道出土の押型文土器との關係は單に出土土器Ⅳ類bが溫根沼Ⅰ類に類似するのみでなく、溫根沼遺跡に於いて押型文土器に伴出した石器はその形態、テクニックに於いて日計遺跡出土の石器に非常に近似している。更に伴出が確認されない石器の中にも日計出土の石器に類似したものが多々ある。

日計遺跡出土の不定形の石器は、物見臺、小船渡平、ムシリ等の遺跡に類品を見ることが出來ず、溫根沼遺跡との類似を考えると、押型文土器に伴存する可能性が大である。

このように見てくると北海道に於ける溫根沼式押型文土器、朱圓式押型文土器の位置も自ら明らかであり、早期末葉、前期初頭と考えるべきではなかろうか。最後に關東以西に分布する押型文土器との關係は全く不明である。

結　語

以上八戸市日計遺跡出土の押型文土器の編年上の位置についていさゝか私見を述べたが大方の御叱正を得れば

幸甚である。

本遺跡の發掘報告を筆者に委ねられ、種々御教示を賜つた江坂輝彌氏に感謝の意を述べると共に、發掘に御協力を頂いた海上自衛隊八戸航空隊、音喜多富壽氏、その他の諸君に厚く謝意を表する。

註

(1) 二本柳正一・角鹿扇三・佐藤達夫「青森縣上北郡早稻田貝塚」考古學雜誌第43卷第2號 昭和32年

(2) 佐藤達夫・渡邊兼庸「青森縣上北郡出土の早期縄文土器」考古學雜誌第43卷第2號 昭和32年

(3) 河野廣道編「北海道原始文化聚英」昭和8年

(4) 八幡一郎「日本民族」昭和10年

(5) 河野廣道「北海道石器時代提要」ドルメン、第4卷第6號 昭和10年

(6) 河野廣道「斜里町史・先史時代史」1955年

(7) 兒玉作左衛門・大場利夫「根室溫根沼遺跡の發掘について、——溫根沼式押型文土器」北方文化研究報告第11輯 昭和31年

(8) 河野廣道「北海道出土の廻轉押型文土器について」アイヌ・モシリ第2號 1958年

(9) 佐藤達夫氏は(2)で吉田格氏が考古學ノート第4號に報告された高館遺跡を日計遺跡と異る遺跡とされているが、兩者は同一遺跡である。

寄贈交換雜誌目錄

史學雜誌 六九—一～四、 史學會
史林 四三—二、 史學研究會
史學研究 七五、 廣島史學研究會
歷史地理 八九—三、 日本歷史地理學會
日本上古史研究 四—一～五、 日本上古史研究會
岩手史學研究 三三、 岩手史學會
日本歷史 一三九～一四三 日本歷史學會
國史研究 一九・二〇合併號 弘前大學國史研究會
歷史教育 三五年一月～四月 歷史教育研究會
近世史研究 二八、 大阪歷史學會近世史部會
大谷史學 七、 大谷大學史學會
立命館文學 一七七～一七九、 立命館大學人文學會
社會經濟史學 二五—六、二六—一、 社會經濟史學會
史淵 八〇、 九州史學會
北大史學 五、六、 北大史學會
史窓 一六、 京都女子大學史學會
文化 二三—四、二四—一 東北大學文學部
山形大學紀要 人文科學 四—三、 社會科學 一—一、
同 總目錄
山口大學文學會誌 一〇—二、
社會科學論究 五—一、 早稻田大學社會科學研究所
人文論究 二〇、 函館人文學會